
音威子府村 都市圏学生交流推進事業 - 事業評価(概要版) -

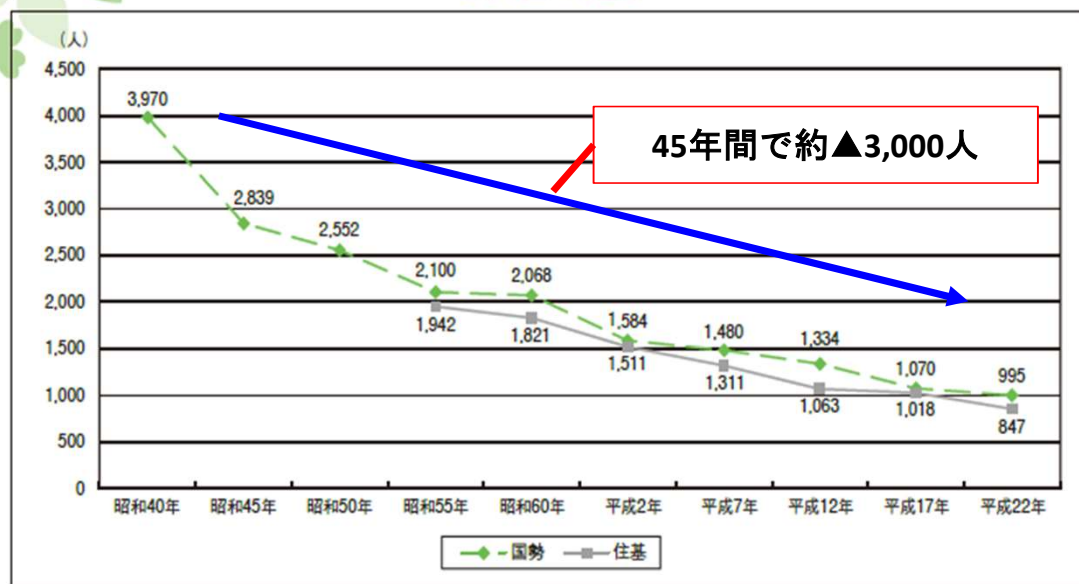
音威子府村複業人材
事業評価アドバイザー 白井 達也

基本課題、および本事業の検討背景

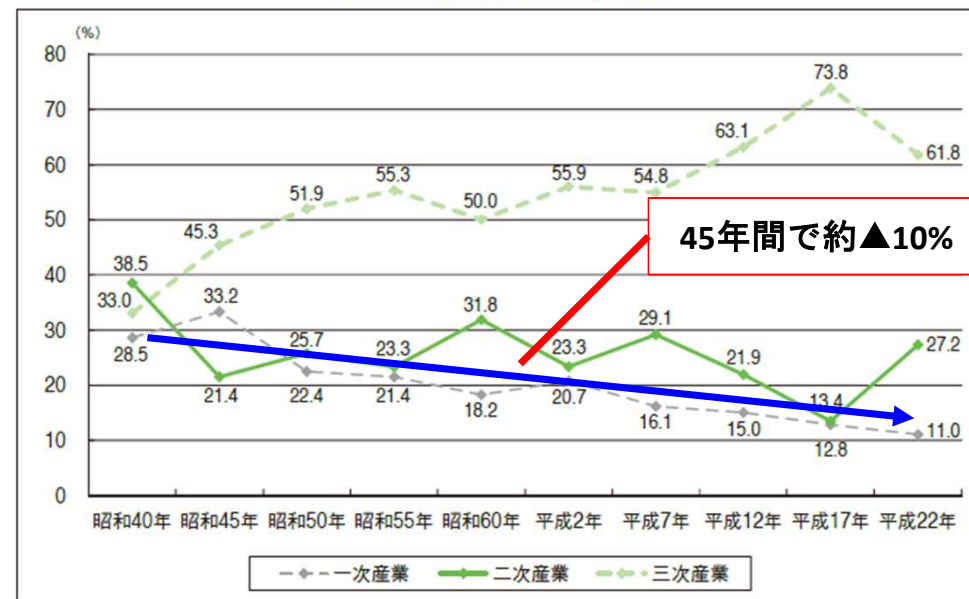
人口減少により、産業維持に大きな懸念がある状況

本村においては、人口減少に伴う過疎化や少子高齢化が顕著であり、主要産業である農業を初めとする一次産業においても多大な影響が出ていることから、定住や移住促進を含む具体的な対策が必要と認識している。

●人口の推移

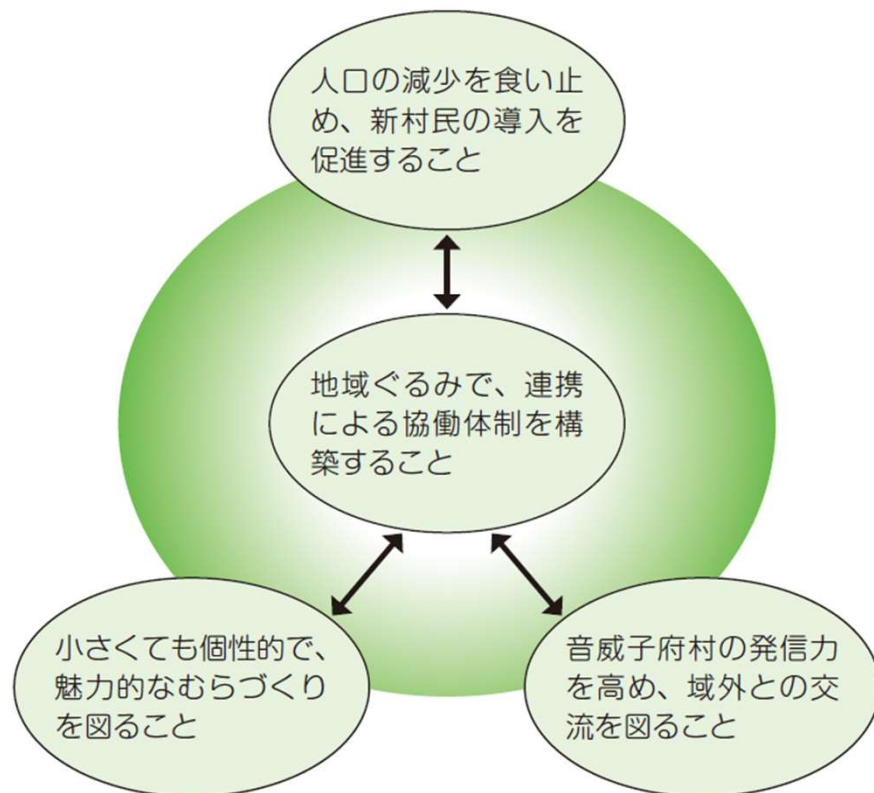


●産業別就業人口の構成比



第5期総合計画において、基本課題と“検討すべき視点”を定義

この課題感のもと第5期総合計画では、地域資源を活かした産業振興と快適な生活環境の創造に努めていくことを主眼に置き、基本課題とそれに対応した検討すべき視点を、下記の通り定義した。



【基本課題に対応した検討すべき視点】

①人口の減少を食い止め、新住民の導入を促進すること

- 村民の福祉を高め、誰もが生涯安心して暮らせるむらづくりを推進すること。
- 音威子府村の環境を求めてくる新しい村民の受け入れ環境を整えること。

②小さくても個性的で、魅力的なむらづくりを図ること

- 高校の立地を活かした“匠のむら”として、魅力ある環境を創ること。
- 音威子府方式ともいえるべき自然環境との共生や、地域間・産業間を結び付けていく“循環・連携型”システムづくりを進めること。

③音威子府村の発信力を高め、域外との交流を図ること

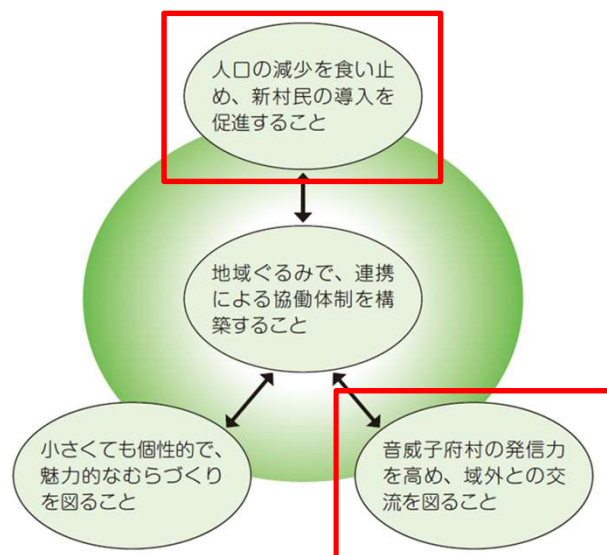
- 音威子府村の環境（資質）を活かした観光・交流の展開を図ること。
- 音威子府ブランドの形成を図ること。

④地域ぐるみで、連携による協働体制を構築すること

- 村民の自治力を高め、共助による支え合いを推進すること。
- 村民・行政・教育機関・企業等の協働体制を強化すること。

基本課題に対する取り組みの一つとして本事業を検討、実施に至った

村の基幹産業である“農業”を活かしながら、新たなアイデアや刺激を受けることで、村民一人ひとりが村の将来を「自分事として」考え、行動を起こす契機とするべく、都市圏学生を受け入れ、村民との交流や協働を促す場として本事業の推進を検討、実施するに至った。



【基本課題に対応した検討すべき視点】

①人口の減少を食い止め、新住民の導入を促進すること

- 村民の福祉を高め、誰もが生涯安心して暮らせるむらづくりを推進すること。
- 音威子府村の環境を求めてくる新しい村民の受け入れ環境を整えること。

②小さくても個性的で、魅力的なむらづくりを図ること

- 高校の立地を活かした“匠のむら”として、魅力ある環境を創ること。
- 音威子府方式ともいべき自然環境との共生や、地域間・産業間を結び付けていく“循環・連携型”システムづくりを進めること。

③音威子府村の発信力を高め、域外との交流を図ること

- 音威子府村の環境（資質）を活かした観光・交流の展開を図ること。
- 音威子府ブランドの形成を図ること。

④地域ぐるみで、連携による協働体制を構築すること

- 村民の自治力を高め、共助による支え合いを推進すること。
- 村民・行政・教育機関・企業等の協働体制を強化すること。

都市圏学生交流推進事業の検討、実施へ

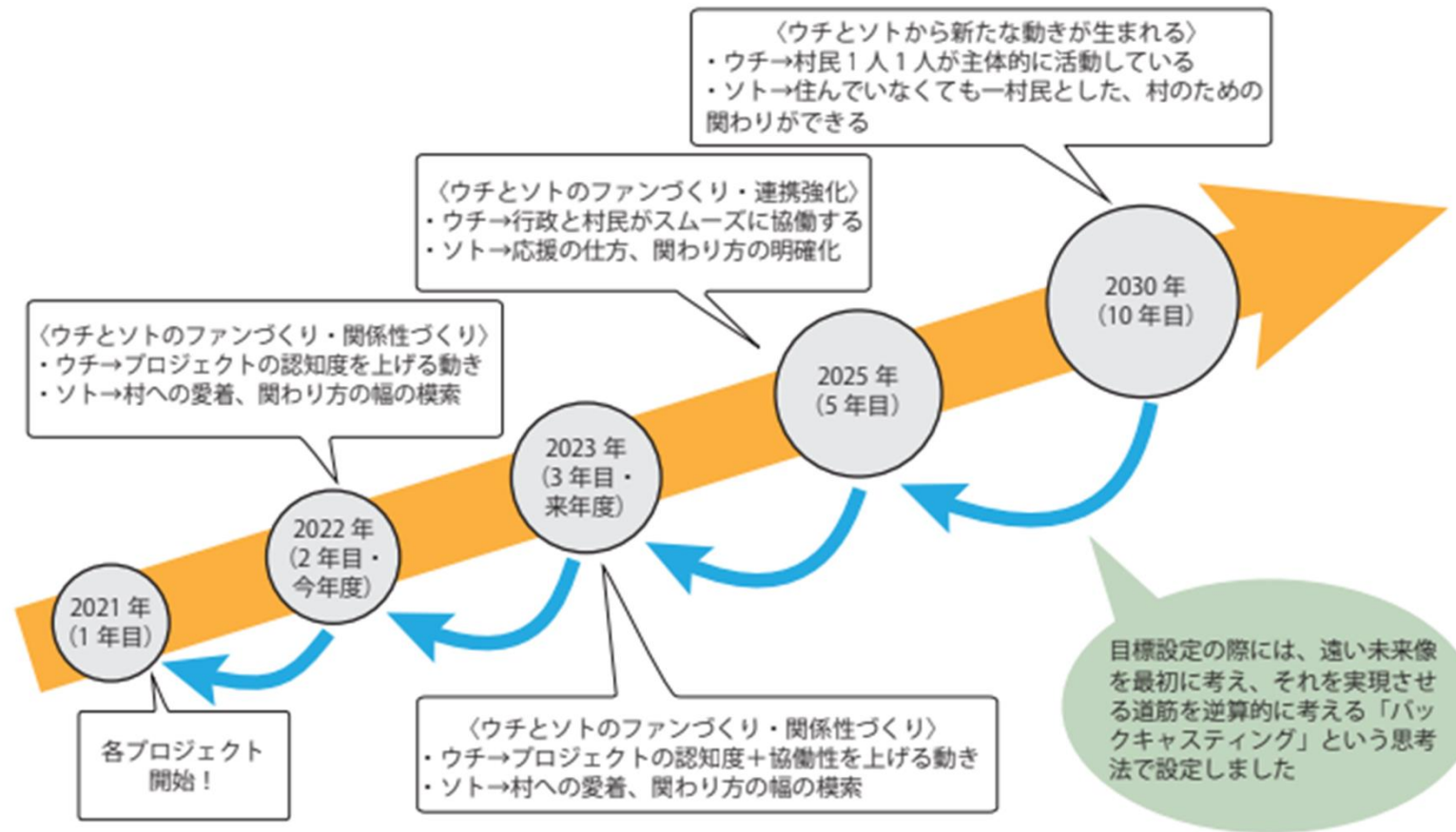
事業内容（概要）

“都市圏学生との交流”を軸にしたまちづくりと、村民の“当事者意識醸成”を模索

役場職員がプロジェクトチームを結成し、専門的な知識や経験を持つ都市圏学生と共同でプロジェクトを立ち上げた。関与者の相互交流を通して、将来の村づくりへと繋がる機運、きっかけづくりを企図した。既存のコミュニティを維持しつつも、新たな関係性を創出し、村全体の活性化に資するものとして「ソト」の再定義も目指した。



事業の長期的な目標は、「ウチ」と「ソト」から新たな動きが生まれること



長期目標の更に奥にある「事業の核心、目指す姿」を言語化

数十年後も活気のある(挑戦ができる)状態で
音威子府村を存続させること

これを実現する為には、「村民一人ひとりの当事者意識」が不可欠

数十年後も活気のある(挑戦ができる)状態で
音威子府村を存続させること



村民一人ひとりが、村の将来を「自分事として考える」ことが不可欠
本事業は、その主体性を“醸成・刺激する”ための施策の第一弾

評価概要・総括

各評価観点における「事業実施前」の状況・課題(Before)

評価軸とした5項目について、本事業実施前の状況・課題は以下の通り。まず、足元はこれらの課題解決を目的とし、本事業を推進した。

評価観点

都市圏学生と村民との 交流の場の創出

- 「ソト」との交流の場が少なく、どのような交流の場が作れるのかアイデアが不足していた
- 交流を円滑に進めるための組織体制や、サポート体制の構築がされていなかった

地域特色の 活用と保護

- 特有の資産や、利活用の可能性がある資産は多くあったものの、有効に活用されていなかった
- 地域特有の資源や文化が「当たり前」のものとして捉えられていた

地域コミュニティの 強化

- 地元住民間でのコミュニティ活動への関心が低下しており、積極的な参加を促すための戦略が必要であった
- 活動を支えるための財政的、人的な資源が不足していた

おと高生との 連携

- 村としての重要な資産として認識はされていたが、長期的な関与を促進するための動機づけとサポートが不足していた
※おと高：村立の美術工芸高校（おといねっぶ美術工芸高等学校＝おと高）

村役場内の 連携強化

- 異なる部署・組織間での情報共有や協力体制が整備されていなかった
- 村役場内での政策や、プロジェクト目標の整合性を確保するための組織内調整に課題があった

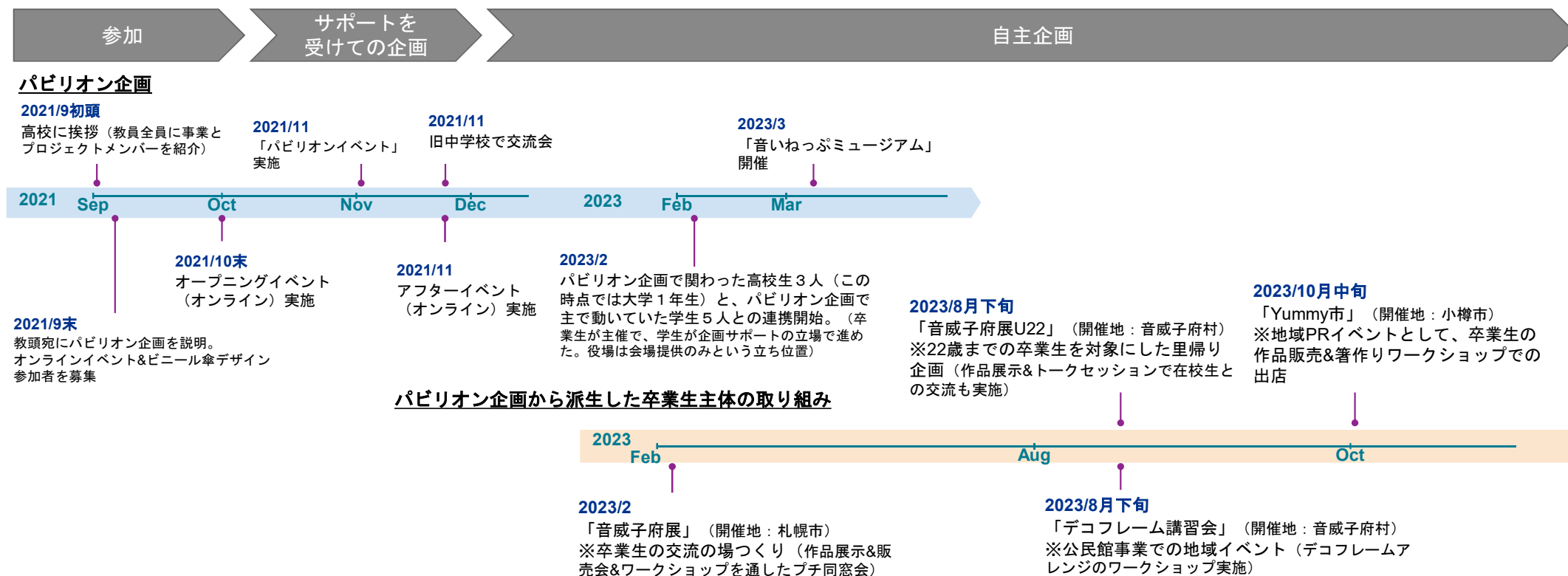
評価概要 (After)

本事業の当初目的は概ね達成した。一方で、まちづくりへの村民個々人の主体的な取り組み姿勢・意識醸成には、まだ発展の余地が残されている。

都市圏学生交流推進事業	
地域の特色を活かして、村民と都市の若者が共同でまちづくりを展開することにより、村民一人ひとりが主体的にまちづくりに携わる意識を高め、地域活性化を実現していくことを目的とする事業	
農業まちづくり企画	パビリオン制作(多世代交流)
● コロナ禍に伴うオンライン受入れ ● 箆島地区を拠点とした遊休公共施設の活用 ● 旧・音威子府中学校校舎におけるワーケーション空間利活用 ● 行政若手職員挙手制によるプロジェクトチームの組成	● 学生の専攻を活かした交流事業 ○ オンラインでの交流 ○ 「OTOINEPPU Pavilion20201」の開催
評価観点	
都市圏学生と村民との交流の場の創出	 ● オンライン・オフラインの両軸で様々な交流の場を創出
地域特色の活用と保護	 ● 単発のイベントで終わらず、その後のアフターイベントも含めて多くの交流を創出
地域コミュニティの強化	 ● 遊休施設の保護・利活用で活動拠点を作った ● 他の資産の洗い出し、活用可能性が課題
おと高生との連携	 ● 学生と高生双方の強みが活かされた ● 音威子府村独自の「強み・資産」としておと高生個々人の重要さを改めて認識できた
村役場内の連携強化	 ● 関与事業者に限らず、子ども達との交流も実施 ● 他地域への展開、関与者以外への周知、巻き込みが課題
	 ● 都市圏学生とおと高生双方の強みが活かされた ● 音威子府村独自の「強み・資産」としておと高生個々人の重要さを改めて認識できた
	 ● (本企画では連携は前提とはしていなかったため評価せず)
	 ● 1年目の発信・周知を経て能動的な参加も生まれた
	 ● 挙手制での若手職員の参画 ● プロジェクトチームからの発信が主で相互性が薄かった

おと高生との連携、卒業生を中心とした主体的な関わりの重要性を再認識

事業推進において当初は主目的としていなかったが、「おと高」との連携は不可欠であった。在校生に加えて卒業生とも積極的に関わりを持っていくことで「おと高生」という一括りの関わり合いではなく、個々人の名前と顔が一致する状態での関わりを実現できた。それにより、「知見や経験を村へ還元する想い」も強化でき、卒業生による自主的な展示「音いねっぷミュージアム」の企画・開催にも至った。



外部評価も獲得 – ソトノバ・アワード2021で『部門賞』を受賞–

パビリオン企画では外部評価も得た。パブリックスペース利活用事例コンペティション『ソトノバ・アワード2021』で『部門賞』を初受賞。



出所 : <https://e-kensin.net/news/147023.html>、<https://www.vill.otoineppu.hokkaido.jp/kakuka/chiikishinkou/oshirase/sotonoba.html>

事業評価総括

- 本事業を軸に継続関与者数(*)が増加し、内外からの評価も得られ、本事業は関与者（都市圏学生、村民、自治体）それぞれの主体性を醸成・刺激するための施策として一定の成果が認められた

(*)…定義：村として協力要請をする際に、連絡を取りやすく、且つ能動的・主体的に協力を得られる関与者の数

- 音威子府村が持つ資産を活かして同様の取り組みを継続することで、更なる主体性の向上、地域活性化が見込まれる

- 定量面評価：

波及効果も含め継続関与者数が123人へ増加し、村として協力を得られやすい環境の土台を構築できた

- × 当初の「定量目標」の設定が無く、評価が難しいのが実態

- 一方、把握できている範囲の関与者に鑑みると、継続関与者数及び本事業から波及した関与者数が増加

- 今後の取り組みにおいては、より定量的な評価軸を設定する必要がある

- 例）地域に対する認知度や、取り組みやイベントに対する満足度など

- 定性面評価：

関与者それぞれの主体性が向上するとともに、パビリオンは外部評価を得て賞も受賞することができた

- 関与者に大きく2つ（想い・行動）の変化が起き、村への関わり方がより主体性を増した

- 『ソトノバ・アワード2021』ではパビリオン企画が『部門賞』を初受賞

- 主目的では無かったが「おと高生」個々人との関わりも深まり、卒業生の自主展示企画開催にも波及

- 「おと高」が、村として“最も重要な資産”であることの再認識にも繋がった

- 将来の村を盛り上げる・活気づける役割を担っていく村の若手職員が、挙手制で組織を組成し事業を牽引した

事業評価を受けた今後の展開について

今後の展開に向けた振り返りと検討点

本事業では「村民と都市圏学生との関係性が構築されたこと」自体が大きな成果と言える。さらに、今回の都市圏学生のような一時滞在やオンライン・リモートでの関わりも村の活性化に効果があり、村民1人ひとりが村の「良さ」に気づけることもわかってきた。これらの関係構築を、更に広く拡張していき「音威子府村だからこそできる取り組み」を模索していくことが望まれる。

事業の継続と改善点

- 人の循環
 - 村民として長く住む人々と、新たに参加する人々のバランスを取ることが重要。村外からの新しい参加者が地域へ新たな刺激をもたらす
- イベントの活用
 - 新たなイベント（夜市、ショーイベント、謎解きイベントなど）を通じて、コミュニティの活性化と外部からの参加を促すなど、村民の「顔」が見えるような取り組みを継続していくことを検討する

次への展開

- 村民の意識醸成に向けた取り組み強化
 - 事業を通じて、村民自身が村の将来に対する意識を高める取り組みを強化する
 - 外部との交流
 - 村外の人々との継続的な交流を促すことで、新たな発見や村への愛着を育てる
 - オンライン交流の拡充
 - 村に来なくても参加できるオンラインプログラムを増やし、子どもたちの教育や娯楽の選択肢を広げる

事業を通じた成果と気づき

学生との本気のまちづくりで、
活気のある（挑戦できる）村に向けた
“基礎作り”は成功



村内外の関与者による主体的な取り組みで
「村の魅力」に改めて気づいた

本事業に対する評価を受けた今後の展開



継続の鍵は
一人ひとりが改めて
「村の魅力」に気づくこと

村の魅力(=地域特性)の発見に資する
取り組みの展開を検討していく